

4. む す び

暖地型牧草の雑草対策が強く求められ、その問題提起と考え筆をとった。また、寒地型牧草の雑草防除は諸外国では多くの研究がなされており、わが国においても研究報告が散見され、暖地型牧草の雑草防除の参考になると考え、紹介した。暖地型牧草の雑草対策は考え方にとどめた。なぜなら、暖地型牧草の雑草防除に関する報告は皆無といってよく、一口に暖地型牧草といっても一年生の草種から永年生の草種まで種類が多く、各々の生態研究は緒についたところである。

一方、雑草についても、その生態研究はもとより、牧草畑における雑草の位置づけを明らかにしておく必要がある。なぜなら、同一の雑草種でもその位置づけは子実、根等を利用する作物と生草を利用する牧草とでは異なるからである。たとえば、メヒシバは普通作物畑では最強害草の一つであるが、酪農家ではとうもろこしを刈り取った跡のメヒシバに施肥して、それを刈り取って利用している例がある。この場合、

メヒシバは雑草ではなく、むしろ牧草に近い。

しかし、その畑に翌年暖地型牧草を入れ、牧草とメヒシバの競争が生じて全生草重が低下したとすると、この場合にはメヒシバは雑草といえようが、この場合のメヒシバも作物畑におけるほど、雑草としての位置は高くない。

上記、牧草、雑草の生態、牧草と雑草との関係を充分把握できた時に始めて、その雑草対策の確立が可能となる。

近年、わが国において、牧草の採種栽培が重要視されてきている。牧草種子では純度が非常に重要な要素であり、そのため、アメリカ等では純度に一定の規準を設け、その規準以上の純度の牧草種子に保証種子のレッテルをはって販売している。この純度を落す最大の要素は雑草種子の混入であり、採種栽培においては雑草防除が大きな課題である。牧草の採種栽培は以上のような観点から、その圃場は消滅をきわめることが大切であり、そのためには利用できるあらゆる除草法が導入される必要があり、特に、化学的な除草法が強力な武器となろう。

昭和48年度冬作関係除草剤 試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会

当協会委託の昭和48年度冬作〔麦、いぐさ、水稻刈跡〕除草剤作用特性および適用性試験成績検討会が、9月3日東京農林年金会館において開催された。その結果の概要は、次のとおりである。

供試除草剤数について対象別年次別の傾向は第1表の通りであり、昨年に引きつづき供試薬剤、試験点数とも本年度さらに減少の一途をたどった。

2. 試験結果の概要

1. 供試除草剤の動向

昭和48年度の供試薬剤数は9薬剤で、作用

性試験，適用性試験を含め，べ試験点数 28 点 薬剤は麦類対象でトリブニール水和剤，水稻刈
であつた。供試薬剤の成分一覧は第 2 表のとおり 跡対象で，デゾレート A 粉剤の 2 剤のみであつ
りであるが，これらの薬剤中，実用化とされた た。この使用基準は，第 4 表のとおりである。

＜第 1 表＞ 冬作関係除草剤試験供試薬剤数の推移

	試 験 年 次 別 供 試 薬 剤 数									
	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
麦 類	30	25	13	7	9	8	11	8	6	4
い ぐ さ	6	4	4	4	3	0	0	0	3	2
水 稻 刈 跡	20	26	15	27	19	31	35	13	5	3
休 耕 田	0	0	0	0	0	3	0	4	0	0
畦 畔	0	1	6	0	0	0	0	0	1	0
そ の 他	32	20	12	1	1	1	1	0	0	0
計	88	76	50	39	32	43	47	25	15	9

＜第 2 表＞ 昭和 48 年度冬作関係除草剤供試薬剤成分一覧表

対 象	試験の種類	薬 剤 名	剤 型	有効成分および成分含有率	委 託 会 社
1) 麦 類	作 用 性	SL-27	水 和	未 公 開 40%	石 原 産 業
		SL-36	水 和	未 公 開 40%	同 上
		SL-67	水 和	未 公 開 40%	同 上
	作 用 性 適 用 性	トリブニール	水 和	・ 1,3-ジメチル-3-(2-ベンゾチアゾリル) ウレア 70%	日本特殊農業
2) い ぐ さ	適 用 性	S-28	粒	・ 0-エチル-0-(3-メチル-6-ニトロ フェニル)-N-セカンダリブチルフォス フォロチオアミデート 7%	住 友 化 学
		S-28・DBN	粒	・ S-28 (上記) 7% ・ DBN; 2,6-ジクロロベンゾニトリル 2%	同 上
3) 水稻刈跡	適 用 性	SC-70	水 溶	・ 塩素酸ナトリウム 70%	昭 和 電 工
		デゾレート・A	粉	・ 塩素酸ナトリウム 60%	日本カーリット
		M&B-9057	液	・ メチル-4-アミノベンゼンスルフォニルカ ーバメイトナトリウム塩 37%	シオノギ製薬

＜第3表＞ 昭和48年度冬作関係除草剤実用化判定表

区 分	実	実，継	継 続	継 続 ？	中 止
1) 麦 類		トリブニール水和			
2) いぐさ			S-28粒 S-28・DBN粒		
3) 水稻刈取		デゾレートA 粉	SC-70水溶 M&B-9057液		

＜第4表＞ 昭和48年度冬作関係除草剤実用化薬剤使用基準

区 分	薬 剤 名	判 定	処 理 法	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壌	適 用 地 帯	使用上の注意
1) 麦 類	トリブニール水和	実，継	茎葉兼土壌処理	播種直後～雑草（スズメノテッポウ）2～3葉期まで（小麦，ビール麦3葉期まで）	（成分） 20～30 g/a	火山灰土壌 沖積土壌 壤土～埴土	小麦；寒冷地以西（畑作，水田裏作） ビール麦；温暖地西部以西（畑作，水田裏作）	処理時期を厳守
3) 水稻 刈跡	デゾレートA	実，継	茎葉処理	刈取後10日以内，マツバイ枯葉前	成分 900g/a	全 土 壌	寒冷地以西	1.落水散布 2.連用をさける

昭和47、48年度牧野草地関係 除草剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会

牧野草地関係除草剤については，主要雑草であるワラビに対する効果試験成績検討を，昭和47年に行なって以後，検討会は開かれていなかったため，昭和47，48両年度に実施した試験についての検討会を49年9月2日に日本植物調節剤研究協会事務局で開催した。

供試薬剤および試験場所ならびに実施年度は

第1表のとおりである。

北海道地区においては，現地試験の行なわれたものもあり，また中間の成績検討もなされたが，今回の全般的な判定結果は第2表のとおりである。

以下，各除草剤についての成績の概要を説明することにする。